主日礼拝９月２５日（日）
題　「神のすばらしい約束」
テキスト：ペトロの手紙Ⅱ　１章１節～１５節

皆さん、おはようございます。
先週は台風接近で心配されましたが、多くの方々が集い永眠者記念礼拝を共に捧げることができ、墓前礼拝も守られまして感謝でした。みなさまのお祈りとご奉仕を心より感謝いたします。
みなさま、台風の被害はどうだったでしょうか？
教会は建物や内部への浸水は免れ感謝でした。ただオリーブの鉢が二度ほど倒れたとお隣の北野上さんからお聞きました。元に戻してくださったそうで感謝しました。また、教会の建て物の前方外にあるゴミ箱のふたはあったのですが、下の部分が見あたらず、探していますと道の下の水路の中ほどにありました。どうして取り出せばよいのかと思案しています。
台風が過ぎて急に秋が来た感じの天候になりました。

話は変わりますが、今から３０年程前に住んでいた、四国の松山の教会で、教会内の壮年会の初案で「遺言の書き方」について教会内で勉強会が行われました。幸いというか教会員に弁護士の方がおられたので講師として教えて頂いたのですが、日本では、当時教会ではまだ珍しいことだったと思います。

さて宗教改革者のマルチン・ルターの説教に「死の準備教育」というものがありますが、ルターはその中で二つのことを教えています。
一つは、自分の持っている何がしかの財産は自分の死に際して、残る者への財産のことで互いに争いが起こらないように気をつけること。そのために生きている間に対処しておくこと。とても現実的な勧めです。財産を巡る争いは洋の東西を問わず、時代を超えて起こるということです。
そして二つ目は、自分の「魂の問題」を解決しておくようにということ。すなわち神の前に己の心、魂の平安を保つということです。これが難しいことのように思えます。
主イエスは、「わたしの元に来て安らかでいなさい。」と招いてくださっていることを覚え、そのことを忘れずに与えられた日々を生きたいものです。

さて、今週からペトロの手紙Ⅱを学びます。この手紙はペトロの名によって書かれた手紙とされています。古代にはよくあったといわれます。

内容は使徒ペトロの愛する信徒たちへ遺言のように記されている個所なのです。まず１２節以降のことばに初めに聞きたいと思います。

イエスの弟子ペトロは坦々と語ります。
「12:従って、わたしはいつも、これらのことをあなたがたに思い出させたいのです。あなたがたは既に知っているし、授かった真理に基づいて生活しているのですが。13:わたしは、自分がこの体を仮の宿としている間、あなたがたにこれらのことを思い出させて、奮起させるべきだと考えています。14:わたしたちの主イエス・キリストが示してくださったように、自分がこの仮の宿を間もなく離れなければならないことを、わたしはよく承知しているからです。15:自分が世を去った後もあなたがたにこれらのことを絶えず思い出してもらうように、わたしは努めます。」　ペトロはこの時、自分の地上の最後を意識していたようです。
「わたしは、自分がこの体を仮の宿としている間、」とは、人間の地上の肉体のことで、誰にでも終わりは来ます。ペトロは、最後ローマで殉教の死をとげたという伝説があり、西方カトリック教会ではペトロの墓の上に現在のサン・ピエトロ大聖堂が建てられていると言われます。またペトロがカトリック教会の初代教皇とされています。

　それはさておき、聖書によればペトロは、愛する現在のトルコ地方に分散して住んでいた信徒たちに自分が神の元に召された後にも思い出してほしいとの思いで、この手紙を書いているということです。１２節から１５節の間に３回、「思い出す」ということばが出て来ます。これは時別な事だと思えます。ペトロの心からの一途な熱い思いを感じるのです。

ところで、ペトロが思い出させたい内容とは何でしょうか。
それは二つのことに尽きると思うのです。
まず、大切なことは、「神のすばらしい約束」があるということです。
そして、神の約束を受けるまでの信徒のこの世での生き方です。わたしたちの生き方でもあります。
３節、４節にあります。
◆神のすばらしい約束：
「 3:主イエスは、御自分の持つ神の力によって、命と信心とにかかわる
　すべてのものを、わたしたちに与えてくださいました。それは、わたしたちを御自身の栄光と力ある業とで召し出してくださった方を認識させることによ

るのです。4:この栄光と力ある業とによって、わたしたちは尊くすばらしい約束を与えられています。それは、あなたがたがこれらによって、情欲 に染まったこの世の退廃を免れ、神の本性にあずからせていただくようになるためです。」

主イエスは、命と信心「心、魂」にかかわるすべてのものを、与えてくださった、ということです。イエスさまを信頼している人は誰でもそのことを信じることが出来るのです。もし神に与えられなかったら、自分で信じなかったら地上でどれだけ地位や名誉や富があっても、ついにイエスを主と信じることはできません。イエスを自分の救い主として知ることはあたりまえのことではないのです。「求めよ、さらば与えられん。」「求めなさい。そうすれば、与えられる。」のです。信仰は神さまから与えられるものなのです。また、からし種一粒の信仰があれば、神さまに認められるのです。

ペトロは信仰者がすでに与えられている神への信頼と信仰を大切にして
この地上の歩みを天に召されるまで続けるようにと信徒たち、ひいてはここにいる私たちを励ましてくれていると受けとめて良いと思います。
5:だから、あなたがたは、力を尽くして信仰には徳を、徳には知識を、
6:知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には信心を、
7:信心には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。

まず「力を尽くして」という言葉が心に残ります。これは、「思いをこめて、一途に、ひたむきに」と受けとめるのです。そして、信仰、徳、知識、自制、忍耐、信心、兄弟愛、愛」と続きます。すべてが輪・リングのようにつながっているのです。

これは、伝道者パウロがガラテヤの信徒への手紙５章２２節で語っている御霊の実の言葉につながるように思えるのです。そこには「これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。」とあります。また「信仰・希望・愛」の教えにつながっているとも言えるでしょう。

信仰者は、神さまの力である聖霊の助けによって、善き力に守られているのです。

8:これらのものが備わり、ますます豊かになるならば、あなたがたは
怠惰で実を結ばない者とはならず、わたしたちの主イエス・キリストを知るようになるでしょう。

「知る」ということばは深い意味があるのです。単に知識ではなく、もう離れることのない「心の深い関係、つながり、交わり」を意味しているのです。

ただし、ペトロは信徒たちへの忠告も忘れません。
9:これらを備えていない者は、視力を失っています。近くのものしか見えず、以前の罪が清められたことを忘れています。
「イエス・キリストの十字架の死によって、罪は赦されている。」ということを。
「罪を赦される」とは、愛なる神さにつながっているということです。
悪い事をして良いということではありません。もう悪い事は出来なくなるのです。そして神さまとイエスさまの愛、人の愛に生かされて希望を持って前を向いて生きて行くのです。

10:だから兄弟たち、召されていること、選ばれていることを確かなものとするように、いっそう努めなさい。これらのことを実践すれば、決して罪に陥りません。
11:こうして、わたしたちの主、救い主イエス・キリストの永遠の御国に確かに入ることができるようになります。

最後にイギリスのエリザベス女王の葬儀で賛美された女王の愛唱讃美歌とも言われる讃美歌２１　１２０番の１節、４節、６節をお読みします。
「１、主はわがかいぬし　われはひつじ
　　みめぐみによりて　すべてたれり
　４、死の陰の谷を　行くときにも
　　災い恐れじ、主ともにいます
　６、命ある限り　さちはつきず、
　　主の家にわれは　永久に住まわん。
　　アーメン

主の平安を祈ります。